

花いちもんめ

おきく

花
い
ら
も
ん
め

児のぬけた縄は記憶の紡錘形

廃校の庭にかなしき孤蝶かな

廃校の蔓草のびて角力草

廃校を灼きつくして夕陽落ち

糸でんわ天を指さす蜻蛉あきつかな

文科省指紋なき児をうみおとし

石を蹴るあの児が欲しい花いちもんめ

昏れなずむ米一粒の地蔵かな

核のゴミ核の傘にぞふりしきり

被曝して濡れて悲しや傘地蔵

文明のはらわた破れ蠅の群れ

秋の空青い目玉のトンボ飛び

属国の陰にはためく旗あわれ

オスプレイ女神があしの爪を研ぎ

国盗りの綱曳きあるや神の国

積木かな国こわれて□となり

耳つけて恥という字が赤面し

欲の皮測りそこねてノギスかな

重力も軽い言葉に腰くだけ

昼下がり屎尿に群れて蝶々かな

結んでも解けてかなわぬ蛇むすび

底日照り紐をむすんで昇天し

日盛りや蟻をまぶして蚯蚓みみずひき

かんたろう蚯蚓や虹のおとし児や

里知るや金魚の鉢にどじょう棲み

どじょう鍋官が奸りし隠しあじ

豆一つあぶく一つの泥鱸どろかな

うしの日や遍路うなぎに串を刺し

秋風に読経ながれて袈裟涼し

風鈴の鳴かずに揺れてぬるい風

法師蟬たぎりし夏の暑さかな

螻螂の三角頭巾が鎌を研ぎ

棚糸瓜逆さに吊りて背をきそい

雨やみて蜘蛛のひろげし珠すだれ

ひぐらしや悲秋の鉦を叩きおり

叩かれて仏となるや
墓ひきがえる

蜘蛛の巣にからめ捕られて蝉の声

くノ一か簾はしるや蝶の影

蝉の翅帆掛けてすすむ夏の蟻

渦巻きし指に吸いつく蜻蛉かな

糸を張り月を爪弾くはぐれ蜘蛛

川瀬かわうそやあしたわが身の危惧種かな

雨上がりなめくじどもが筆の跡

虹の橋毛脛の蟹の横じさり

逃げ水をすすりて蝶の遍路道

団扇もて同じ角度の風をうけ

梅干の皺をすばめて茶を啜り

老いてなお土のめぐみに腰を曲げ

核の雨しみにぞしみて石地蔵

香焚きて比丘尼の袈裟のあやしけれ

満開のさくら根元の生ぐさや

白き足袋季節はずれて死出の旅

愚かなり神の捏ねりし人の型

尾骶骨おのが尻尾をつけあぐね

ゲジゲジの脚百本の匍匐かな

蟻一揆曲ねるホースを進みおり

檻ひとつ茄子ひときれのすだきかな

秋の虫濡れてかなしや草庵

夜もすがら鬼灯ほうずき噛んでる蛙かわずかな

揚羽蝶ろうけつ染めの匠なり

タマムシや神につかえし翡翠かな

きりぎりすシルクハットで物を乞い

たなごころ

掌 灰をころがし彼岸花

極樂ですか柩の中の徳利もて

モノ言わぬ骨が木魚に踊りだし

空蟬やから念仏を唱えおり

かなしきは蠅が位牌にしがみつ

叛骨の焼かれし骨に反りがあり

割れ目みて小僧の叩く木魚かな

桜葬さくらの花の血に浮きて

めでたきは香が棚びく秋日和

読経する導師の首に蚯蚓ひき

ありがたき読経も脛に沁みてきて

野辺送り家紋をつけた蝶が舞い

手を曳くや三途の川の沈下橋

日常を戻して人は額のの中

極楽ですか柩の中にいびき鼾あり

花の値段か花いちもんめ

人の値段や花いちもんめ

原発かかえて花いちもんめ

とけて流して花いちもんめ

あの兎のいない花いちもんめ

ふるさと畳んで花いちもんめ

わらべ唄うな花いちもんめ

脱原発元年

二〇一二年 晩秋

高知県高岡郡四万十町

大正中津川二一〇の一

佐々木泰